

鳴海 風 様

拝 復

4月2日付けのお手紙を拝受致しました。ありがとうございました。

しかし、お手紙を拝読しまして、納得できませんでした。

それは、第1にまさに「信・義」の問題であるからです。「信頼」の問題とも言えます。小生と見ず知らずの方が拙著を無断で、あのようなことを書かれた場合でも、重大問題です。貴兄と小生との関係に「信・義」は存在しなかったと思わざるを得ません。小生の一方的な思い込みでしかなかったのでしょうか。非常に残念で辛く悲しいことです。新聞などでも作家の無断盗用や研究者の無断盗用などが大きな社会問題になっているからです。単にモラルの問題を越えて「法的な問題」になっているからです。技術系の会社であるならば、特許権の侵害にあたるものではないでしょうか。

先の手紙にも書きましたように、貴兄と小生の関係はまさに「信・義」に基づいたものでした。小生が貴兄にお貸しした本は『きりしたん算用記』だけでなく、以前それも急に依頼されて『算法少女』の表紙を電子メールでお送りしたこともありました。また、『赤松則良半生談』もお貸ししたことがあります。本来御著に写真を掲載する場合、「○○○蔵書」などと記載してもよいほどなことです。

第2に、やはり天下の岩波書店から出版されたことです。御存知のように岩波書店は、単なる日本の一つの出版社ではありません。日本の学問文化研究及び出版の権威として君臨していることは、衆知のことです。ましてや、貴兄が私家版として出版されたものではありません。すなわち御本は、権威ある「公的（パブリック）」な存在になっているのです。4月1日の朝日新聞5面の全面に、岩波書店社長山口昭雄氏のお名前と写真が大きく載った広告が掲載されています。小さな出版社では、とてもできないことです。しかもその広告には、

「百年後も読まれる本を今作る。」

と大きく書かれ宣言しています。そうしますと御著も百年後も読まれ、「誤った事実」と「裏切られた信義」とともに百年後までつづくことになります。増刷のとき若干訂正した程度で修復できるでしょうか。拙著『和算の成立—その光と陰』（恒星社厚生閣）を中村正弘先生と小生との共著にしなかったのも、中村先生の「この内容に今後永く責任を持つのは貴君（小生）だから・・・」という強い遺志からです。中村先生は東北帝国大学の学部学生時代から数学論文を英文で東北数学雑誌や学士院記事に書かれていて、88歳の最期のお歳までお弟子さんと共著の英文数学論文を書かれています。和算のなどの論文も最期の年だけでも4本書かれました。しかし著書は『関数解析入門』『数学教育史』（槇書店）の2冊しか出版されていません。探偵小説は最晩年に推理小説協会の関係者が急い

で出版されたので「幻の新人作家天城一」として有名になったのです。それほど本を出版すると言うことの意味・意義を重大に考えていらっしやたのです。

拙著『和算の成立—その光と陰』は、御存知のように通説に真っ向から異議を申し立てた書物です。（*ある方は、「和算史革命だ！」と言って下さるほどなのです。）通説を信じていらっしやる方々には非常に不評（無視・埋葬すべき存在）でしょう。小生の所にも拙著の悪評が間接的に伝わってきます。

平山諦先生が『和算の誕生』（恒星社厚生閣）を出版されたことの反発は凄いものです。現在もつづいています。当然拙著に対する風当たりも強いと思います。平山諦先生の場合、無視できない大きな存在でしたが、小生の場合、無視してよい存在とされているのでしょうか。（*それで書評も友人の唐木田健一氏が書かれたものしか知りません。）

小生の妻に先日の貴兄のお電話の内容を話したところ「それは、決してミスではない！」と何度も断言しました。身近なものの発言ですが、「ミステークではない！」というのです。貴兄は「校正チェックする努力が欠けていた……」とありますが、本当に校正ミスでしょうか。校正とは、本来字句修正、言い回しの修正、文字変換の訂正などです。校正段階では本文内容の基本を変更するなど考えられないからです。小生は貴兄は本質的なことで間違っていると思います。決して微調整できるものではありません。厳しい言い方かもしれませんが、小生の意見はそれほど感情的なものではありません。

ある非常に親しくさせて頂いている高名な研究者から早速お手紙を頂き、その内容は御本について上記のような同じニュアンスの感想意見でした。

第3に、貴兄は日本数学会から出版文化賞を受賞され、多くの講演を依頼され御活躍されています。この意味でも貴兄の御本は公的な存在として大きな影響力を持っているのです。それは貴兄は意図されていないかもしれませんが、間違いなく大きな影響力を持っているのです。その方自身が既に権威をもっている〇〇大学教授方などではなく、御本によって和算や和算小説に初めて興味をもったごく普通の方々にたいする影響力は絶大だと思いませんか。小生は大学教授や和算の専門研究者を対象にして問題にしているのではないのです。むしろ、何の予見や予備知識をもたない普通の読者です。特に、若い読者への強い影響に憂慮しています。小生は長く小中学校の教員だったからです。

第4に、御著 p.80 で「あくまでもフィクションです」と断っています。貴兄自身は自著『算聖伝—関孝和の生涯』を指して「フィクション」という言葉をつかわれているかもしれませんが、しかし、別の読み方ができます。ある親しい研究者の方から拙著『和算の成立』もフィクションですか？というお手紙を頂きました。

ここで明確にしなくてはならないことは、それが貴兄の意図（本意）でなくても、拙著『和算の成立』の全体もフィクションだ！という誤ったメッセージを多くの人達に与えているのです。それは図らずも、「拙著『和算の成立』を無視し、埋葬し、糞糞しよう。」という人達の意向に沿うものになっているのです。それも天下の岩波書店の権威あ

る名前をもってなされたのです。これは研究者として、作家として決してやってはいけない重大な背信行為なのです。

もし貴兄が御著のために参考引用された著書が、東京大学教授、京都大学教授の著作であったならば、同じようになったでしょうか？ 残念ながら小生のように在野の権威も権力もない元小中学校教員の著作など無視・埋葬・篡奪できたこととしか思えないのです。非常に残念で辛く悲しいことです。

第5に先の手紙で書きましたように、少なくとも次の、

①井上筑後守政重及び切支丹屋敷と和算史の関係を論じたこと。

※井上政重はキリシタン史の学者や作家にもほとんど詳しく調べられていません。村井早苗さんくらいです。村井さんと手紙で交流したことがあります。井上政重はあくまでも「悪辣非道の残虐者」です。拙著『和算の成立』ではその井上政重の評価を逆転させたのですから、キリシタン研究の碩学の方々も驚かれたのです。また、切支丹屋敷が拷問屋敷であるというイメージを科学技術研究所というものに反転させたのです。これらは全くのフィクションでないことは拙著をよくお読み頂ければ分かることです。また、井上政重の御子孫井上正敏さんとは、現在でも非常に親しくさせて頂いております。菩提寺も3カ所あることなども教えて頂いております。井上政重の墓石と御位牌の写真までお送り下さったのです。それは何故かと申しますと、御先祖井上政重のことを新しく評価したからです。だれでも御先祖を悪く書かれるよりも、真っ当に良く評価された方が嬉しいからです。井上政重の兄井上正就の菩提寺も墓石も訪ねています。正就の墓石も2カ所あります。御存知でしょうか。正就を刺殺した側（豊島刑部の言い分）についても調べてあります。もちろん、井上兄弟の母親の実家は、小生の数学と部活動の教え子の家なのです。系図なども見せて頂いたことがあります。それほど、小生にとって「井上政重」の存在は厚みのあるもので、他の本からちょっと摘み食いしたような存在ではないのです。ちょっと思い付いたような存在ではないのです。

②ジュセッペ・キアラの存在と墓石発見のこと。

※ジュセッペ・キアラのことは遠藤周作『沈黙』で知られていたものの、背教し、しかも司祭であるにも関わらず妻帯したカトリック教会としても唾棄すべき存在だったので。現在でもカトリック教会で、ジュセッペ・キアラたちルビノ第二隊の名誉が回復されたとは聞いていません。拙著『和算の成立』の最大の目的は、ジュセッペ・キアラたちの名誉回復といっても言い過ぎではありません。それで拙著『和算の成立—その光と陰』（恒星社厚生閣）の表紙は、ジュセッペ・キアラにしてあるのです。この画は、小生の義弟でイラストレーター小森傑氏が誠心込めて描き上げたものなのです。義弟は拙著の内容に深く感動してくれて全ての仕事を投げ打って描き上げてくれたのです。ジュセッペ・キアラの墓石は、最初小石川伝通院であることが分かっていました。文献でもそうです。そのとき義弟の小森傑氏とその奥さん喜巳子さん（*小生の教え子でもある）が必死で資料を捜

して見つけてくれたのです。その本物の墓石が調布市のサレジオ神学院にあることが分かったのです。ちょうど義妹八木真澄さんが調布市に住んでいたのです。早速実地調査をお願いし、サレジオ神学院の関係者との信頼関係ができたのです。それで小生の序文には彼らの名前を書かせて頂いたのです。単なる儀礼としてではなく、ジュセッペ・キアラの墓石発見に貢献した人達を忘れないためです。八木貴之君と小森慧君は小生の甥で、ジュセッペ・キアラとフェレイラの墓石の写真撮影や計測に貢献してくれたのです。小生は公務多忙でとても写真撮影に行けなかったからです。

タシナリ神父はそのころ九州で療養されていましたが、ローマ字で丁寧なお手紙を下されたのです。また、この橋渡しや連絡をサレジオ神学院の方々（特に松尾様）がして下さったのです。拙著には書きませんでしたけれども、小生にとっても非常に重要な出来事があるのです。

ジュセッペ・キアラの墓石を御自身で写真に撮れば、それは「事実」なのでしょうけれども、ジュセッペ・キアラの屈辱を晴らそうという気概と失われそうになった墓石を戦時中であるにも関わらず、雑司ヶ谷墓地から調布までリヤカーで運んだタシナリ神父の深い思いは、そこに存在しません。そのために拙著『和算の成立—その光と陰』（恒星社厚生閣）の後書きで「屈辱の歴史しか残されていない。しかし、歴史のすべてを隠蔽消し去ることはできません。・・・」と書いたのもそこにあります。

小生は学術書でも小説でも最も大切なことは、「他人の屈辱をわが身の屈辱として体が震えるような怒りをおぼえなくしては歴史は書けない・・・」ということです。だからこそ、このことは『平山諦先生長壽記念文集』掲載の拙文 p.78 に引用してあります。小生はまさに「ジュセッペ・キアラの屈辱をわが身の屈辱」として書いたつもりです。その意味で「遠藤周作『沈黙』よりも拙著は深い」と中村正弘先生と小生は確認していました。

③ジュセッペ・キアラの墓石頭部の形がカトリック司祭の司祭帽であることを指摘したことも非常に重要なことです。これは中村正弘先生による御指摘です。拙著をお読み下さった方々の感想でも、あのジュセッペ・キアラの墓石頭部の形には非常に驚かれていました。ある人などは、「関東最大のキリシタン遺跡の発見だ！」とその発見と意義付を評価して下さいました。小石川伝通院にあるジュセッペ・キアラの墓石を見学しましたか。本物の墓石に似せて作ったのですが、まったく違ったものです。それでもイタリア大使のイタリア語の碑文を頂き掲げざるを得なかったのです。墓石頭部の形がカトリックの司祭帽であることに気づいていなかったのです。（*伝通院の方々の御協力によります）

以上のように3点に絞っても、拙著『和算の成立—その光と陰』（恒星社厚生閣）の背景を書くことによって、簡単なものではないことを言いたいのです。拙著でも小生が書きたいことを削ってそのエッセンスしか、ページ数の制限もあり書けないのが実態です。拙著の場合、それでも出版社の御厚意で50ページほど増やして下さいました。

第6に、拙著『和算の成立—その光と陰』（恒星社厚生閣）の小生による序文をお読み

下されば、非常に沢山のお名前と図書館や関係団体が記載されていることが分かります。これは儀礼的に名前を載せたのではなく、拙著を書き上げるために直接史料・資料の御提供や現地の御案内など本当に貢献して下さった方々なのです。松崎利雄先生は拙著を書くためにキーポイントとなった史料の掲載を快くお許し頂きました。またそれだけでなくそれに関連する多くのことをお教え下さいました。松崎先生は多数の貴重史料をお持ちでしたが、それらもお願いしなくてもお贈り下さったのです。和算史研究の重鎮野口泰助先生、福山市在住で三上義夫研究の第一人者藤井貞雄先生は、貴重な研究成果を快くお贈り下さったのです。福島県二本松市のフィールドワークのときなど、福島和算研究の方々など7人が2日間も御一緒して下さいました。佐渡の金子勉先生も第一級史料の御提供で一方ならないお世話になりました。病院で苦闘されていた千喜良英二先生と山形県和算史研究会の方々の論文と貴重な史料提供がありました。拙著の出版前に千喜良先生は御逝去されました。近畿数学史学会の方々の温かいご支援がありました。拙著『和算の成立—その光と陰』が10年近い歳月を掛けて完成できましたが、決して小生一人の力ではありません。このように地方で地道に和算史を研究している方々の御協力によって、拙著はやつと完成したのです。横塚啓之先生、小川東先生は未発表であるが素晴らしい研究論文をお贈り下さったのです。このことを機会にして現在でも深い交流をさせて頂いております。小生は有名な大学教授の方々よりも、こうした地方で地道に一般に知られていない方々の研究成果や努力こそ大切にしたいと思っています。また、拙著私家版を引用して下さいました金子務先生、伊達宗行先生も御本、さらに貴兄の御本『算聖伝—関孝和の生涯』を感謝の気持ちを込めて載せさせて頂きました。

第7に、小生にすれば、拙著を書き上げるために大凡10年近い歳月と夥しい大量の史料・資料・書物やフィールドワークによって書いたものです。拙著の各章末にある<文献・註>を見て下されば分かります。在野の小生にとって、その史料・資料・書物のすべてでは自費で購入するしかありません。公共図書館の中には在野の人間に非常に冷たい扱いをしてコピーもさせてくれない所もあるのです。残念なことです、金銭でしか計れないとすれば1千万円以上かかっています。小生にすればそれだけ価値あることであつたと今でも確信を持って言えます。

中村正弘先生は作用素環論を東北大学を研究拠点にして素晴らしい業績をあげられたことと、『和算の成立』はそれに匹敵する価値ある業績であると過分なお手紙を頂いたこともあるほどのものです。貴兄にとって『算聖伝—関孝和の生涯』は、沢山ある自著の一つでしかないかもしれません。だから「ミス」「筆がすべった」「力説し過ぎた」「校正チェック不足」という言葉で表現されているのだと思います。

縷々これまで長々と書きましたのは、そのような言葉で表現してほしくないほど重大で本質的なことなのです。だからこそ、最初の手紙に「怒りを通り越して、深い悲しみに沈んでいます」と書かざるを得なかったのです。

再度申し上げます。以上のような理由で、貴兄から頂いた手紙の内容ではまったく納得ができません。

もし、貴兄が貴兄の畢生の研究書について同じ扱いをされたとき、お手紙に書かれたようなことで納得できるでしょうか？ 少なくとも小生にはできません。

再度申し上げます。何しろ天下の学問研究文化出版の最高権威を自認している岩波書店が「百年後も読まれる本を今作る」として出版しているのです。御著『和算小説の楽しみ』により一般社会はそれらを追認し定説とするでしょう。結果として、拙著は無視・埋葬・篡奪の対象になるでしょう。これはある意味大袈裟言えば、学問研究（特に民学）の死をも意味しています。 岩波書店も責任があります。その問題も問いたいと思います。

拙著の名誉回復をすることは容易なことではできません。御本が三千部も印刷出版され、広告宣伝（* 4月5日朝日新聞夕刊1面に岩波書店の広告が掲載され、そこに御本も宣伝されていますね）され、その後に増刷した場合に若干の追加訂正された程度で、拙著の名誉は回復されるでしょうか？。小生ならば、新聞に謝罪広告を出し、その上で出版社と相談し回収・廃版にします。

誠実な対応を実行するお手紙（御返事）をお待ちしております。

以上、取り急ぎ。

鈴木 武雄


P S. 小生の手紙を読まれて貴兄の身近な方々はどんな感想をお持ちでしょうか。小生はほとんどのことを妻や子ども達に読んでもらい感想や意見をもらいます。丁度次男たち家族が来ましたので皆で貴兄の御本、お手紙と小生の手紙などを読んでもらい話し合いました。身内の意見でしたが、小生の考えに賛同してくれました。客観的な判断ができそうな研究者や他の分野の方々、知識人にも読んで頂き意見をお聞きしています。

貴兄のホームページに御本の訂正を書かれるようですが、貴兄の言い分しか公表されません。小生の3月28日付けとこの手紙を削除なしでそのまま掲載して頂くことがなければ、HPを読まれた方は誤解されるでしょう。 誤解の上塗りになりかねません。

貴兄は「ミス」とおっしゃっていますが、御自身で気付かれたのではありません。 小生の手紙による指摘（抗議）によって初めて気付かれたのです。御自分で気付かれたことと、他者の指摘によって初めて訂正したとは全く異なる次元のことではありませんか。

尚、岩波書店の編集者（吉田宇一氏）へも小生の手紙をお送りください。